

たぐみ

Craftsmanship

特集 筆谷桂作陶展

第4号

伝統とモダン

たぐみの古い顧客で、ファッション関係の仕事をされている方が来られ、共通の知人をはさんで昔話に花を咲かせた。つい先日のことである。

浜田庄司、芹沢銈介をはじめ民家建築の伊東安兵衛など当時の民藝協会同人たちがみなホームスパンやツイードのジャケットを愛用してお洒落だったことや、昔のたぐみには、何かしらいつも新しい空気があつて新鮮だったことなど話題となった。

「棟方さんの柄の浴衣なんか素敵だったなあ」「芹沢さんや一門の方の、型染模様の萌木浴衣もみなモダンでしたね」「そう、そのモダンよ、たぐみに一時いたことのある大塚末子（デザイナー）さんのお末羽織のデザインなども当時の先端をいったものだった。暮らした手帖の花森安治さんも、ずい分取り上げてくれたものですよ」。

民藝の新作運動が、決して伝統の形骸に固執するものではなく、本来は常にその時代に生き、むしろ時代の求めるものを先取りした創造の運動であったことを思い起す会話であつた。

そういえば日本が初めてというカナダの大学の副学長を知人が連れてきたことがあつた。たぐみで何が一番気に入りましたかと訊ねたところ、島岡達三さんの作品が一番佳いということであつた。その理由を聞くと、「モダンだから」というのである。

島岡作品といえば、益子の土味や、縄文や窯変の技法からして、日本のものとも伝統的な陶芸と思つていた私にとって、目を開かされた感があつた。

先入観にとらわれない外国人にとつて、島岡作品が、自由で、斬新で個性あふれるものであり、それがまたほんとうは日本の秀れた伝統に根ざしたものであることを、鋭く見抜いての言葉だったと私は思うのである。

（志賀直邦）

たくみ企画展

筆谷桂作陶展

会期

四月二十六日（土）～五月一日（木） 会場 たくみ二階サロン
四月二十七日（日）、二十九日（日）は営業いたします。

桂に期待する事

島岡達三

桂は小さい時は少々変っていて私の知人などからはこれは将来大物になるぞと言はれたものだが、大きくなるに従い勉強大嫌い、高校にも行かぬと言ふ。それを一家総掛りで説得してやつと宇都宮短大附属高校の調理科へ入学したが、これも余り性に合はぬらしく私は三年間彼の料理を一度しか喰べた事がない。

卒業したら今度は焼物をやりたいと言ふ。これは自分から進んで言い出した事だから大いに結構と、とりあえず栃木県立窯業指導所の伝習生として三年間ロクロの基本を学んでから私の許

へ来た。

もともと物作りが好きだったから、水を得た魚の如く生々とロクロに励んだ。

音楽、それもジャズが好きで、ギターとドラムを受持ち友人とグループ活動もしている様だ。仕事場では私の隣でロクロをひいているが、私は仕事中心

筆谷ファミリーのこと

筆谷桂君は島岡先生の長女淑子さんの子息である。つまり島岡先生の孫であるが、同時に大正から昭和にかけて院展や日展で活躍された画家、筆谷等（とろ）親の内孫にもあたる。

父筆谷等（とろ）さんも松屋での個展でおな

フエム放送でクラシックを聞いているが、私の不在の時はジャズに切り変ってポリユームも大きくなっている。

この六年間で随分上達したと思うが、その成果は今度の会で見て頂きたい。ただ一人前の陶工として立つてゆくには成形だけでなく、釉、絵付け、焼成等も身につけなくてはならず、これらの勉強が大事である。

この会が終わったら彼は日本の各陶業地のみならず、海外まで足を伸して見聞を広めたいと言ふ。

私も後数年は敢張って彼が大きく成長して戻ってくるのを待ちたいと思ふ。

じみの画家、母淑子さんは吹ガラス作家であつて、桂君は血筋、環境としては恵まれているといえよう。しかし、資質がただ精進によつてのみ磨かれることを知るのとはご家族である。

若き獅子は彷徨し、必ずたくましく育ちゆくであろうことをご家族とともに期待するのである。

（S）

本のひろば

〈思い込み〉の世界史(山口洋一著)を読んで

「外交官が描く実像」とサブタイトルにあるように、この本は著者が永年の外交官生活(トルコやミャンマーなど大使を歴任)をとおして痛感されてきたことをまとめたものである。

山口氏は、国際間の常識がいかに誤解と偏見に満ちたものであるか、それがどれほど諸民族間の融和と相互理解の妨げになっているかということ、ご自身の現地での体験と調査に基づいて明らかにされている。

いわゆるイラク戦争、米英によるイラクへの攻撃の正当性と隠された真実についてアジア、アラブの各国でも問題とされ、また対イラク戦終結後の、民族、宗教感情や経済格差による反感の拡がりを考えたとき、この本から学ぶものは多い。

山口氏のいう「思い込み」とは先入

観あるいは既成概念といつてもよい。

近代史において、西欧的歴史観、価値観の絶対性が信じられ、これと異なる文明の、または民族の独自の価値観は否定され、遅れたものとされる。

遅れ劣った社会や国は、欧米の価値観に同化し、その社会経済的体系に組みこまれるために力づくでも従わさせねばならない、というのがブッシュ大統領の「思い込み」といえようか。

ブッシュだけではない。私たちがいかに常日頃「思い込み」によつて物事を判断し、真実を見出すことに鈍感になつていくかをこの本は教えてくれる。内容をまず見出しから追つてみよう。

第一部第一章は「西洋的価値観至上主義の風潮」と題し、現代が欧米軍事大国の意のままになる恐ろしい時代とのべ、反対に発展途上国における、一時

的な軍政への評価や、欧米に迫いつくための教育改革の問題点にも言及する。

第二章「ミャンマー情勢の虚像と実情」と第三章「強まるトルコ・パッシング」では、当事国の歴史と実情が正しく海外に伝えられていないことをのべ、その主たる原因として先進国メディアの偏見報道なども取りあげている。

また第二部では「十字軍をイスラム側から斬る」と題し、中世の十字軍がいかに宗教的使命感とはほど遠く、当時盛況を誇ったイスラムとビザンチンの文明を破壊し略奪したか、その侵略者としての実態を文献によつて明らかにしている。

ブッシュが「この戦さは、今日の十字軍である」とのべたことを思い起すと、この本のいままさに必読であることがお解りいただけると思う。

(志賀直邦)

二〇〇二年十月二十日、勁草書房より第一刷発行、二七〇〇円。

山梨県高根町

浅川兄弟資料館を訪ねて

中澤三知彦

あゝ！何と素晴らしい！何の言葉も出ない。頭から背筋へと感激が走る。ここにいる皆々が同じ感激に浸る。太陽が西に沈み八ヶ岳連峰の黒い姿が真赤な空を背にして眼前に拡がる。何一つの動きのない静寂の中、只自分の身のふるえを感じるだけ。自然がつくり出す美は完全無欠、そして生命あふれている。

いま私等は「浅川伯教・巧兄弟資料館」を見学して館外に出て、西空を見上げた瞬間である。三十名程の皆々が一律に感じた衝動である。浅川兄弟についてはじめて知り、兄弟二人の朝鮮に対しての考え方と行動について心より感激し、かつての日本人の朝鮮人に対する対応について反省を覚えて外に出たその時に、自然の、夕陽の映し

出す感動と重なり合ったのである。

皆から一様に出た言葉は「この美しい自然の中に育った浅川兄弟の人間性はまことに素晴らしい。余り世に知られていないのはどうしてだろう」。三十名程の小グループの旅で、無理にこの資料館に案内し、一同に感謝された事に私はうれしく思った。

朝鮮の歴史と文化をこよなく理解し愛し、且つ植民地であった朝鮮において日本の軍や官憲のきびしい監視の中で、朝鮮人のために一生を尽した浅川兄弟に、私は今更肺腑をつくものがあった。また朝鮮人のもつ美意識を見出し、絵画をはじめ、特に李朝の陶磁器に対して深く調査、探求に打ち込み、柳宗悦たちの民藝の思想と運動が生まれる根源ともなった。

私が生まれたのは一九一六(大正五)

年であるが、その頃浅川伯教さんは朝鮮で小学校教師をしており、弟巧さんも朝鮮総督府農商工務部山林課に勤務し、一般朝鮮人の中にあつて仕事に励んでいた。柳宗悦が浅川兄弟を識ったのもその頃だが、その縁のひとつが、兄伯教が千葉の我孫子の柳家に持参した六面取秋草文染付壺の静かな美しさへの感動にあつたことは知られている。私が中学に入學した頃(一九二九年)私の家に朝鮮の焼物が数点あつた記憶があるが、これは浅川兄弟と親しかつた安倍能成さんと両親との交友によるのかも知れない。

浅川巧さんは一九三一(昭和六)年風邪をこじらせて若くして(四十歳)死去された。この折安倍能成(当時京城帝大教授)さんは巧について次の様に惜んだ。「巧さんは私の最も尊敬する、そうして最も好愛する友人であつた。巧さんは正しい義務を重んじ、人を畏れず神のみを畏れた独立自由な、



浅川伯教・巧兄弟資料館の外観（上）と館内

頭脳の勝れ鑑賞力に富み、また官位にも学歴にも権勢にも富貴にもよることなく、人間としての力だけで生きぬいて行った人であった。ほんとうにえらい人で、かかる人の喪失は朝鮮にとつて大きな損失であるばかりでなく人類の損失だと思う」。また柳宗悦さんは「あんなに朝鮮を思い朝鮮人を愛した人は他にいない。そして朝鮮人からも愛された。私とは長い間の交友である。彼がいなかったら朝鮮に対する私の仕

事は半分も成し得なかったであろう。朝鮮民族美術館は彼の努力に負う所が甚大であった」と記した。
兄の伯教さんは朝鮮の陶磁器の研究家として知られ、朝鮮半島の隅々まで足を運び、高麗、李朝の窯跡をおよそ七百力所も発見調査を重ねてそれをまとめている。戦後は日本国内でも活躍され昭和三十九年八十歳で逝去された。
なお弟の巧さんの墓は、韓国の忘憂里の共同墓地に埋葬されており「韓国

の山と民藝を愛し、韓国人の心のなかに生きた日本人。ここ韓国の土となる」と韓国語で刻まれている由である。

浅川兄弟の出身地は山梨県高根町であるが、高根町では平成八年に「浅川兄弟を偲ぶ会」を創設し、平成十年末には資料館を高根町生涯学習センターの中に創設して一般に公開している。

朝鮮半島の人々とは深い関係にある日本人としてはぜひこの資料館を訪れて、浅川兄弟の事績と、朝鮮の美術や工藝について知って頂きたいと思うし、また柳宗悦の民藝思想を学び、更に韓国人と日本人の今後の交流について思索して行きたいと思う。

（東京民藝協会会員）

浅川伯教・巧兄弟資料館

（高根町生涯学習センター）

山梨県北巨摩郡高根町村山北側

電話 〇五五一一四七―三二一一

FAX 〇五五一一四七―三七七八

若き日の 島岡氏のことなど

古川正夫

昔のたくみをご存知ない読者のため、昔のことにも触れてほしいとの編集者の要請もあり、本稿連載ではしばしば第一次「月刊たくみ」をだぶらせながら筆を進めることにしていますがご寛容ください。

昭和三十年代前後は、まだ週刊誌の種類も少なく、わが国におけるメディアが未開化の時代でした。こういう時代にあつて第一次「月刊たくみ」は、その後の出版ジャーナリズムが辿った行き方をかなり先取りした誌面づくりをしています。そのへんのことを走り書き風にご紹介しましょう。

昭和二十年前半頃から、たくみでは毎年デパートで大掛かりな日本民衆展を開催しています。二十九年の第六回

展では、その特集号（二十号）を二十頁建で組み、五頁にわたるグラビアに柳宗悦氏解説「眼で見る民衆」で全国の代表的焼物を紹介しています。また、故浜田庄司氏の後、押しも押されぬ後継第一人者になられた、当時新進気鋭の作家島岡達三氏の「益子焼のできるまで」が八回にわたつて連載され、好評を博しました。さらにクッキング、ハウジング、ファッションの分野にまで踏みこんでいます。

日本橋たいめい軒主人の料理メモの連載、宇野重吉氏や水沢澄夫氏（美術評論家）の新築住宅を写真と図面入りで紹介、お二人の解説を、宇野さんの家については、谷口吉郎、剣持勇氏などわが国を代表する建築家が宇野氏を囲んで式場隆三郎氏を司会とする座談会まで行っています。また山田五十鈴さんや奈良岡朋子さんなどの女優（いづれもたくみのファン）に、大塚末子さんの創作きものモデルになっていたなど、ミニコミPR誌が大雑誌

顔負けの多彩な奮闘ぶりでした。

上述の島岡氏の連載がはじまったのは、氏が三十四歳の時で、連載を担当した私は、打ち合わせや原稿取りで何度も島岡窯を訪れました。東京工大出のインテリ陶芸家島岡氏は、焼物の工程を専門的かつ理論的に、やさしく解説してくれました。いま読み返しても水準の高い解説書になっています。島岡氏のところにお伺いするうち、私は象眼海鼠釉（なまこぐすり）の急須セツトを頂戴しました。こぶりながら姿がよく、やさしさのなかに力があり、民芸になによりも大切な使い勝手がよく、島岡氏の若き日の作品ながら流石と思わせる、私の好きな作品のひとつになりました。

この作品は、五十余年の風雪を経たいま、湯呑みは失われ、ところどころ欠けた急須だけが残っていますが、時にはわが家の玄関のあがりかまちにある時代物の蓑簞筒の上に、花活けに使われたりして、いまでも現役中です。

（山種美術館嘱託）

東北の荒物屋

荒物屋といってイメージが沸くのは東京では昭和二十年代生れまでもしれません。

時折、雑誌などで各地に残る荒物屋を紹介する特集が組まれますがノスタルジー雑貨と紹介される始末です。

東北出張でたくみが訪れた町は多々ありますが、私にとっては岩手県遠野、



出荷を待つミノ（山形）

盛岡、二戸。秋田県は大曲、湯沢、西馬音内、横手。山形県は新庄、鶴岡、高畠などが印象深い町でした。

遠野の小林商店は民芸店がよく仕入れに訪れた荒物屋さんです。北は二戸から宮古、近在では附馬牛、有住、南は宮城県の出山、築館付近の編組品まで扱っていました。

店の裏手に大きな倉があり、話もそこそこに品選びをしました。遠野近在の品をのみ選び出す為には各地の特徴を知っていなければ出来ません。

店のエキおばあちゃんは絶対に産地を教えてくれませんでした。帳簿を見ずに値段を端から答えていく記憶力に圧倒されました。歳は八十を超えていました。毎年のように訪ねるので珍しい品は部屋の奥や倉の中に箆を掛け取り置いてくれました。そのエキおばあちゃんも亡くなりました。

紺屋町、鉈屋町、材木町、肴町と今も町名の残る盛岡。雫石川を渡り仙北

町を荒物屋を探して歩き回った年もありました。

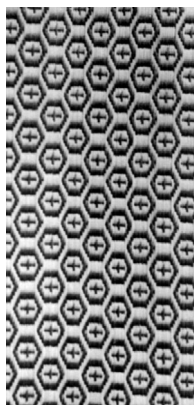
何処の荒物屋の主人も作り手を良く知っていました。物の良し悪しも分かり、注文すると手配し、取り揃えて送ってくれましたが、今はほとんどが代替わりしました。荒物屋の主人が編組品の延命に果たした役割は大変大きかったと思います。

作り手を直接訪ね、注文する事も増えています。各地の協力者はとても大事な存在です。民芸店であったり、地方協会であったり、作り手であったりします。

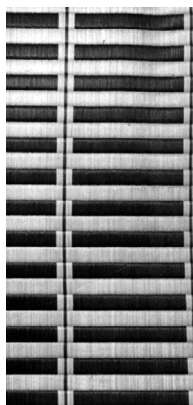
今年三月に奥会津三島町で第二回全国編組工芸品展が開催されましたが、ここでも各地の民芸店の協力があがり、昨年度を上回る出品を見ました。

今年も少々出遅れましたが東北を一回りする予定です。五月になれば仕入れの出来た品々が店頭にも並びます。

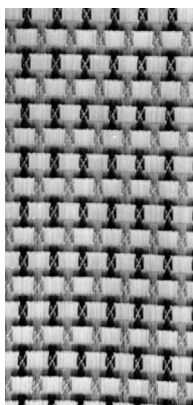
（笠原 勝）



亀甲柄



棒 縞



昭和縞

たくみ歳時記 倉敷の花筵

「わたし、たくみさんの花ごぎ、大好きなの。また買いに来たわ。とって

もいいのよね！」大きな声でそう言いながら足早に入ってこられた方があった。辛口のコメントと文章と、そして双子で知られる方、照れ屋とお見受けしたが、こつちも妙に照れてお声をかけないでしまった。

しかし自分の気持ちに正直に語られる方の言葉だけに嬉しく、そしてそういった使い手の生（なま）の声こそ作り手にとって大きな励ましになることを思った。

いま良質で美しいその花ごぎは倉敷で作られる。蘭草の畳表のほとんどが中国などで作られている現在、限られた国産の良質の蘭草を用いた花筵は、倉敷の品が一番である。

かつて山口泉氏の肝いりで、民藝協会の仕事として芹沢銈介、外村吉之介両氏が倉敷花筵のデザイン指導に当たったことがあった。その成果はこん日まで受けつがれ、美しい織り模様として暮らしを彩っているのである。（S）

あとがき

今号に「浅川兄弟資料館を訪ねて」を寄稿いただいた中澤三知彦さんは、陶芸の島岡達三先生の東工大時代からの親友で、八十六歳の今日まで幾つもの事業をなさってこられました。

過日大学の後輩諸氏を誘っての訪問記ですが、なんとみずみずしい感動に満ちた文章でしょうか。人間いくつになっても、真実を求める心と、好奇心と、人を思いやる心があれば歳はとりません。

中澤さんのいつも前を向いた、感動溢れた言動に励まされるこの頃です。（S）

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八四一二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七
FAX 〇三―三五七―二一六九
振替 〇〇―一〇―二二三五六五九
定価 六〇円（税込）